

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報



あの町この町
サンジョアキン Sao Joaquim

特集 ブラジルのSDGsカカオ最前線

- ・ エスピリトサント発の高付加価値カカオ製品
- ・ 変遷するカカオ生産中心地
再興中のパイアーア州から躍進中のパラ州へ



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

新規会員募集中!

詳しくは P21 をご覧ください。

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あの町この町 サンジョアキン [沼田行雄]	3
ブラジル・ナウ モデルニズモの発点「近代芸術週間」100周年を巡って [編集部]	5
【特集】ブラジルのSDGs カカオ最前線 エスピリトサント発の高付加価値カカオ製品 [麻生雅人]	6
【特集】ブラジルのSDGs カカオ最前線 変遷するカカオ生産中心地 再興中のパイア州から躍進中のパラ州へ [編集部]	8
農林水産省 「中南米日系農業者等との連携交流・ビジネス創出委託事業」 [松尾有紀]	10
滋賀県から見えるブラジル像 [岡崎駿輔]	11
ブラジル現地報告 Make Your Life GOSTOSO ① [REI CAPOEIRAP]	12
連載・日系企業シリーズ Mitutoyo Sul Americanaの歴史と5年間の駐在生活 [齋藤裕介]	13
連載・ビジネス法務の肝 スタートアップ法の成立 [柏 健吾]	14
連載・税務の勤どころ 2022年度における直近の税制動向 Part2 [三上智大/天野義仁]	15
エッセイ ブラジル映画 心に残るワンシーン『Árido Movie』(2005) [宮下ケレコンエリカ]	16
ジャーナリストの旅路 ブラジル日系社会 出会いと別れ [中島 昇]	17
連載・文化評論 労作『アンドウ・ゼンパチ』(サンパウロ人文研)を読む 改めて二つの『ブラジル史』の意義を考える [岸和田仁]	18
キャンパス・コラム USPでのオンライン留学を終えて [竹平健一]	19
新刊書紹介	20
連載・ブラジルあれこれ トメアスーあれこれ	20
協会からのお知らせ	22



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」

「幹についた小さな花と力強く突き出たカカオの実。種類によって赤や黄色もある。アマゾン州マデイラ川沿いの村。川に金採掘の屋根舟が浮かぶ一方、日系人によるアグロフォレストリーの研修を受けた村人が地元での普及に希望を託していた。」

永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等
www.hikarunphoto.com

サンジョアキン Sao Joaquim

南部サンタカタリーナ州内陸部のサンジョアキンは、標高1,350メートルの高原地帯にある人口約3万人の小さな町であるが、リンゴの里として知られ日本と馴染の深い場所である。

契機となったのは、1971年にJICAの長期専門家として派遣された元長野県果樹試験場長の後沢憲志氏である。後沢氏は、約3年の実地調査を経て、気候条件等からリンゴ栽培の適地としてサンジョアキンを発見、栽培品種として「ふじ」を選定した。同氏は、コチア産業組合と連携しつつ、ブラジル政府からの融資取付けに奔走し、同地に土地を購入。1974年7月に最初の日本人移住者16戸が入植し、本格的なリンゴ生産を開始する。

ただ、リンゴは、植付けから3年間は収穫ができず、その間、農家の人々は、ジャガイモなど単年作物生産で生計を維持しつつ、後沢氏の技術指導を受けながら何とか栽培を続けた。1977年の初収穫も雪(ヒョウ)害でリンゴが傷物になるなど、多難なスタートであったが、入植者達の地道な努力と日本政府による継続的な技術協力の成果もあり、非日系の生産者も増加し、リンゴの生産量は着実に拡大した。そんな後沢氏に対して、地元市政府はリンゴの初収穫が行われた年に名誉市民賞を付与、1982年には顕彰碑を建立してその功績に応えた。

1970年代半ばの私の研修時代、ブラジルには日本で見慣れたリンゴはなく、街の市場では輸入された小粒で甘みのないリンゴしかなかった。実際、1977年の国内生産は1.4万トンに過ぎず、消費の90%をアルゼンチン他からの輸入に依存していたが、1985年には、生産量が24.2万トンとなり、僅かながら輸出も開始するまでに成長した。2019年現在、ブラジルのリンゴ生産量は世界第11位、約120万トンまで拡大しており、サンジョアキンを中心とするサンタカタリーナ州が国内最大の生産地域である。昨2021年8月には、サンジョアキン産のリンゴ・ふじが、ブラジル知的財産庁(INPI)から、原産地認証(IG)を受けるまでに至っている。

私がこの地を訪れたのは、2度目のブラジル勤務となった1993年の8月であった。任地ポルトアレグレからバスに乗り、夜遅くに地元のバスターミナルに到着した。日本人会代表の方々の暖かい出迎えを受けたこと、降雪もある冬の寒さの中、マントを着込んだ地元の人々の姿、日系農家の栽培地を訪ね、収穫を間近にしたたわわに実るリンゴを幹から手に取って食べたこと、風光明媚な山岳地帯の景観を満喫したこと等が忘れられない。

沼田 行雄 (協会理事)

あの町、
この町

▲サンジョアキンの「ふじ」リンゴ





華やかな香り

深いコクとうまみ

素材を生かす澄んだ赤橙色

もう日本から持ち込まなくても大丈夫！
リベルダージ地区やお近くの日本食材店で
お買い求めいただけます。

お待ちせいたしました！
あの「キッコーマン本醸造しょうゆ」が
いよいよブラジル・サンパウロで
現地製造・販売されます。

主原料



大豆



小麦



塩

日本での歴史ある製法にこだわり、伝統的なしょうゆの原料である「大豆」と「小麦」を使用。

現地製造



日本からの技術者の
厳しい管理のもと、
**サンパウロ・
カンピーナス工場**で
しょうゆを製造し、
ご提供します。

お問い合わせ KIKKOMAN DO BRASIL INDÚSTRIA E COMÉRCIO DE ALIMENTOS E BEBIDAS LTDA.
TEL:011-3283-0733 E-MAIL:contato@kikkoman.com.br

@KikkomanBrasil

ALIMENTOS

BEBIDAS



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

モデルニズモの出発点 「近代芸術週間」100周年を巡って

今からちょうど100年前の1922年、2月13日から18日にかけての一週間、サンパウロ市立劇場において「近代芸術週間」と名付けられた文化イベントが開催された。いわゆるモデルニズモ（モダニズム＝近代主義）のオフィシャルな出発点とみなされる文化運動で、アニタ・マルファッチ（画家）、オズワルド・デ・アンドラーデ（作家）、マリオ・デ・アンドラーデ（作家・民俗学者）、ディ・カヴァルカンチ（画家）、ヴィラ＝ロボス（作曲家）らが主要なプレーヤーであった。

この大イベントは、作家グラッサ・アラニャのオープニング講演「近代芸術における美的情感」で幕開けし、いくつもの前衛的文学作品の朗読が続いたが、参加者の興奮状態がピークに達したのは、マヌエル・バンデiraの詩『蛙たち』がロナルド・デ・カルヴァーリョによって代読された時であった。古い文学形式を蛙にメタファーしたことで、高踏主義文学を強烈に批判した内容であったため、絶賛する声と怒号とブーイングが同時発生したのであった。

そんな「近代芸術週間」の宣言は、次のようなアジテーション調となっている。

「あらゆる文学的タブーを打ち破ろう！我らは躍動する力に満ち溢れた新時代に生きているのだ！今は飛行機とラジオの時代である！オリンポスの神々を打ち崩そう！ソネットを打ち崩そう！因習的芸術表現を打ち崩そう！文法を打ち崩そう！愚かな隷属的詩文を打ち崩そう！我らは躍動的かつ新たな詩形式に相応しい大胆なイマジネーション溢れる自由詩を綴ろう！メランコリーを打ち崩そう！我らは豊潤な新大陸の子だ！よって陽気で強くあらねばならない！我らの大地の芳香が匂い立ち、民衆の夢を最大限に描いた、真の意味でのブラジル文学を創造せねばならないのだ！」

（田所清克／伊藤奈希砂著『社会の鏡としてのブラジル文学』より引用）

欧州大陸では第1次世界大戦の終戦を祝福し、前世紀的過去との決別を求めて急展開していたヨーロッパ前衛芸術の諸流派（キュビズム、シュールリアリズム等）がパリを中心として渦巻いていた。このインパクトを生真面目に受け止めたブラジルの若手文学者やアーティストたちは、政治的には独立国（1922年は独立100周年）だが、文化的には欧州の植民地であり続けるブラジルのあり方を巡って、文化の真の近代化を追求したのがこの「近代芸術週間」といえるだろう。

そんなモデルニズモ100周年ということで、サンパウロでは、市の文化局が音頭を取って「Modernismo 22+100」（近代主義22プラス100）というタイトルをつ

けた祝賀イベントが100日間開催された。1月22日から5月1日までの100日間、記念シンポジウムやら記念展示会などが行われ、並行してサンパウロ州政府も OSESP（サンパウロ州交響楽団）による100回イベント（コンサートやリサイタル）や記念セミナー、演劇・ダンスパフォーマンスなどを開催し、「近代芸術週間」の歴史的意義を強調していた。

となれば、当然ながらサンパウロの主要メディアは、フォリャ・デ・サンパウロ紙もエスタド・デ・サンパウロ紙もこの100周年について大きく扱っていたが、ブラジル全国のメディアも同様かということでもなかったのが実情であった。

例えば、ノルデスチ（北東部）の場合はどうか。レシーフェの主要紙ジョルナル・ド・コメルシオは、2月14日付け記事において、「ブラジルは今日においてもその近代性について再審を求めている。この「1922年の近代芸術週間」100周年においては、サンパウロのヘゲモニーについても人種主義（人種差別問題）についても見直し・再精査が求められている」という趣旨の、サンパウロ中心主義を揶揄するような、なんとも皮肉っぽい論調でこのイベントを論じていた。

それは、後に大作『大邸宅と奴隷小屋』を書き上げることになる少壮社会人類学者ジルベルト・フレイレが主導して「第1回地方主義大会」が1926年レシーフェにて開催され、この時採択された地方主義マニフェストがモデルニズモを批判的に吸収したノルデスチ地方文化再興の「闘争宣言」となって、多くの若者に影響を与えたという史実があるからだろう。

すなわち、グラシリアーノ・ハモス、ジョゼ・リンス・デ・レゴ、ジョゼ・アメリコ・デ・アルメイダ、ラケル・デ・ケイロス、ジョルジ・アマードといった作家たちによる社会派リアリズム文学の作品群は、1920年代から40年代にかけてノルデスチ文学と総称される、ブラジル現代文学における一大潮流を造形していったのであり、これはサンパウロで生み出された近代主義文学よりは実態としてブラジル文学の近代化を実践した、と断言できるからだ、といわざるをえない。

本年2022年は、独立200周年、モデルニズモ100周年という節目の年であり、ブラジルの近代化について改めて再考する年である。ブラジルウォッチャーとしての弊誌もその末席を汚したいと考える次第である。

『ブラジル特報』編集部

エスピリトサント発の 高付加価値カカオ製品

高付加価値で注目を集める リニャーリスのカカオ

今年(2022年)3月2日、エスピリトサント州リニャーリス市は、8月に同市で国際カカオ&チョコレート・フェスティバルを開催すると発表した。このイベントはラテンアメリカ地域で最大のカカオフェスティバルになる予定で、消費者に向けてはグルメイベント、専門家向けにはカカオ豆やチョコレートの品質向上のためのフォーラムなどが計画されている。

エスピリトサント州は、現在国内3番目の生産量を誇るカカオ産地であり(エスピリトサント州農村開発・技術支援研究機構(INCAPER)によると同州におけるカカオ生産の耕作面積は23,672haで、年間5,467トンのカカオ豆を生産している)、同州のカカオ生産の約85%を担っているのがリニャーリス市だ。

しかしリニャーリス市が誇るのには生産量だけではない。近年この地から、次々と付加価値の高いカカオ製品が生み出されている。

リニャーリス市のカカオ産業は、2017年に世界最大のチョコレートの祭典「サロン・デュ・ショコラ パリ」で、同市の生産者エミール・デ・マセード・ゴメス・フィーリョ氏がインターナショナル・チョコレート・アワードを受賞、世界で最優秀カカオ豆ベスト18入りを果たしたことで大きく注目を集めた。

ブラジルでは2015年頃から、カカオ自体の味が楽しめるプレミアム・チョコレートが街中でも広く流通するようになったが、エミール氏が本格的に自家製チョコレートを作り始めたのは2013

▼エミール氏のカカオ農場(筆者撮影)



年から。前年の2012年、バイーア州サルヴァドールにて南米で初開催となった「サロン・デュ・ショコラ サルヴァドール」に自作チョコレートを出品したところ高い評価を得たことから、チョコレートの開発にも力を入れ始めたという。

現在エスピリトサント州では、エミール氏の農場で作られる「カカオ・エン・コール」をはじめ、24銘柄のチョコレートが造られており、その多くがカカオ生産者が自ら作るトゥリー・トゥ・バー/バーン・トゥ・バー製品となっている。

リニャーリス市の カカオ産業の歩み

市による国際カカオフェスティバルの開催計画からも見てとれるように、リニャーリス市のカカオ産業の成長は、官民挙げての取り組みに支えられている。

同市は、いち早く2012年に国内で初となるカカオ豆の地理的表示の認証(IG)を取得している。主導したのはエスピリトサント州カカオ生産者組合(ACAU)だ。

これを受けてACAUは、2016年より中小零細企業支援サービス(SEBRAE)の支援を受けながら、地元生産者への技術や生産管理のトレーニング、カカオIGの普及や広報に取り組み、品質のガイドラインづくりなどを行ってきた(ちなみに、ブラジルのカカオ豆に関するIG認証は、その他の地域では2018年にバイーア州南部、2019年にパラ州

トメアスーが取得している)。

生産者への教育や支援の取り組みは、段階を追って持続しており、現在は新しいフェーズに入っている。ACAUとSEBRAEは、2021年からはコンサルティング会社(パライオ・デザイン+エストラテジア)を迎えて、より具体的に生産者たちと対話を行いIGを背景にしたブランディング・プロジェクトをスタートしている。

また、リニャーリス市のカカオ農家の多くは、南バイーアと同様に、大西洋岸森林の自然の中でカカオを栽培するカブルッカ農法によって栽培を行っている。1980年代にブラジル国内の広域にわたってカカオ生産に打撃を与えた「魔女のほうき病」(フロステイボッド病)が、リニャーリス市は2001年にも猛威を振るった。地域のカカオ栽培は壊滅的な状態になったが、この地を流れるドーシ川沿いの森林の中で生き残ったカカオ(中には原生林もあるという)を活用しながら、品質改良による病気に強い多様な種の苗を植え、カブルッカ農法に移行して再生を図ったという。ここでは、カカオと共にゴムの木が混作されている。

「ゴムの木とカカオの木は相性がいいのです。ゴムの木は根を地中の深いところに張りますが、カカオの木は浅いところに根を張ります。また、同じ昆虫がゴムの木とカカオの木で花粉を散らしてくれます。収穫時期がずれるので収益面でもいいコンビネーションです」(エミール・デ・マセード・ゴメス・フィーリョ氏) さらには、カブルッカ農法による自然



▲カブルッカ農法の混作の風景(筆者撮影)



麻生雅人
(『メガブラジル』編集長)

▶プリンセザ・イザベルの
蒸留所とアンドレ氏
(アンドレ・スカンピーニ提供)



と共に栽培や収穫を行う農法で安定した生産を続けるための、さまざまな取り組みも行われてきた。アグロフォレストリー農法によるカカオ生産で知られるパラ州トメアスーの生産者とも交流して、現地の視察ミッションも行っている。エミール氏によると、トメアスーが種からカカオを育てるのに対し、リニャーリスでは苗を育ててからカカオを栽培しているため、栽培方法はまったく同じではないが、学ぶことは多かったという。また、エスピリトサント州農村・森林保護研究所(IDAF)は、2020年より、カブルッカ農法地域の環境管理基準の標準化、保護エリアの法的な境界の設置などの規範指標を作成して発表している。

ところで、2012年にIGを取得してから、認証を活用した生産者の研修がスタートする2016年まで4年のタイムラグがあるが、これは、2014年から2016年にかけて約3年にわたってこの地域を大規模な干ばつが襲い、生産者たちが打撃を受けたことも要因のひとつとなっている。自家製チョコレートなど保存が可能な製品の開発は、そんな自然災害によるカカオ豆の生産が滞っても、経済的な補完が行えるというメリットがあるのだ。

そして2020年、そんなリニャーリスから、またまた新しいカカオ由来の製品が生み出された。カカオの果肉部分をプレスしたカカオ蜜を発酵、蒸留してつくるカカオ蒸留酒だ。

廃棄果肉の有効活用から 生まれたカカオ蒸留酒

カカオ農場のほとんどは、チョコレートの原料となるカカオ豆を収穫する目的でカカオを栽培するが、カカオの実を割ると、カカオ豆は白い果肉に包まれている。この果肉、糖度が高く甘いに加え、独特の酸味があって、カカオ豆~チョコレートの味とはまた異なった、クセになる美味しさを持っている。

しかし農家の目的はカカオ豆なので、

▶「カカワトル」と、
カカオの実をわったところ
(アンドレ・スカンピーニ提供)



豆を包む果肉部分は、豆の発酵に使われるか、農家ではおやつなどで食べることもあるが、後は多くの場合、捨てられてしまう。パラ州トメアスーでは、アグロフォレストリーの農地で栽培された他の産物(アサイー、パッションフルーツ、グアバなど)と共に果肉も冷凍パルプに加工されて製品化されているが、ブラジル国内の大多数のカカオ農園は、そのような加工施設を持っていない。

近年、サステナビリティが意識される中、さまざまなカカオ農園でも、果肉や皮など廃棄部分を再利用する動きが高まっており、果肉から作ったカカオ蜜を製品化している農場もある。

リニャーリス市でカカオ農園を運営するアンドレ・スカンピーニ氏は、カカオの果肉の糖度が高いことに着目して蒸留酒づくりに取り組んだ。

手始めに、自家製の蒸留キットを使って試作品を作り、カカオ生産者たちに飲ませたところ、好評だったことから本格的な商品化に着手した。

サトウキビの搾り汁からつくるカシャッサが国民酒として親しまれているブラジルでは全国に蒸留酒を作る技術やインフラがある。アンドレ氏にとって幸運だったのは、リニャーリスには、全国でも指折りの銘酒プリンセザ・イザベルの蒸留所があったことだ(同ブランドのオーク樽熟成は2021年ブリュッセル国際スピリッツコンクールでグランドメダルを受賞している)。

ところで、リニャーリス市のカブルッカ農法ではゴムの木のほかに、いくつか自生している樹木がカカオと共に森林の中で育っている。その中には、カシャッサの熟成によく使われるジェキチバというブラジル原産の木もある。プリンセザ・イザベルもジェキチバを使っているため、カカオの生産もカシャッサの生産も共にこの農法の恩恵にあずかっていることになる。

閑話休題。管理も行き届いたプリンセザ・イザベルの蒸留所の協力を得ながら、試行錯誤を繰り返してカカオ蒸留酒は完成した。ただし、その道のりは困難の連続だったとアンドレ氏は語る。

「特に時間がかかったのが、蒸留する前の発酵の段階でした。カカオ農家やカカオ専門の研究者は、チョコレートの原

料となるカカオ豆の発酵に関する知識はありましたが、蒸留酒のためにカカオの蜜を発酵させるメソッドはなく、すべて自分でメソッドを作り上げるしかなかったのです」

かくて、カカオ蜜を発酵させるための酵母の一部にもカカオの果肉部分を使うなど、アンドレ氏独自のレシピが完成して、カカオ蒸留酒は誕生した。製品は、カカオ飲料の歴史の源流といわれるアステカ文明に敬意を表して「カカワトル」(古代アステカ文明の言葉で「苦い水」を意味していたという)と命名された。

現在、アンドレ氏の農場では、やはり廃棄されていたカカオの実の皮も、地元のアイスクリーム屋さんでカップに使うなど再利用の取り組みが進んでいるという。

さらに、アンドレさんは「カカワトル」のオーク樽熟成バージョンや、「カカワトル」をベースにしてジェニパーベリーや多様なボタニカル(カカオニブなどカカオ由来のものも使用)を入れたカカオ由来のジンの開発に着手している。

南バイーアでも作られている カカオ蒸留酒

カカオ蒸留酒に関しては実はリニャーリス市に先駆け2018年に南バイーアのイリュウスでも作られていたことを記しておこう。

生産者は、ミナスジェライス州から2013年にイリュウス市で農場を購入してカカオ生産を始めたというマルセロ・アブランクス氏。しかし、カカオ栽培事業に乗り出したとたん、干ばつに襲われ投資したお金をほとんど失ってしまった。

カカオ豆の栽培が限定的にしかできなくなった状況の中、これまで廃棄されていた果肉から採った蜜や、蒸留酒など福産品の開発に着手したという。マルセロさんの場合は自身で農場の中に蒸留所を作って、お酒づくりにとりくんでいる。こちらは、カシャッサとカカオ(現地発音はカカウ)をかけて「カウシャッサ」と名付けられている。



●特集●ブラジルのSDGsカカオ最前線

変遷するカカオ生産中心地 再興中のバイーア州から躍進中のパラ州へ

『ブラジル特報』編集部

「世界史を変えた」チョコレート

我々が日頃お世話になっている食べ物がいつ頃から世界に広まったのか、といった歴史的背景を知りたくなったら、専門書よりも『図説 世界史を変えた 50 の食物』（ビル・プライス著、井上廣美訳、原書房、2016 年）あたりを読んだほうが知的好奇心を満足させることができるだろう。この図説本には 50 の食物を巡る歴史エピソードが記載されており、文章ばかりか写真や挿絵も楽しみながら読めるからだ。このイギリス人作家が書いた面白本では、15 番目に登場するのがチョコレートである。

「たいていの人はチョコが大好きで、チョコがまったくもって好きではない人がいるとは信じがたい。チョコレート関連の事業は、いまや全世界で年間 300 億ポンドに相当し、しかも急増しているといわれている。ということは、500 年前に母国の中米からやってきたチョコレートは、他の食べ物にはめったに見られないような形でわたしたちの心をつかんだということだ。」という書き出しから始まって、中米マヤ文明の古典期（4 世紀頃）にはチョコレートは存在していた、という起源から、侵略者スペイン人が 16 世紀になって欧州へチョコをもたらした経緯が書かれている。

1828 年オランダのチョコレート製造業バンホーテン社がカカオ豆からココアバターを取り出してココアパウダーを作るプレス機を開発したおかげで、「ダッチプロセス」と呼ばれる製法が確立され、現在もこの製法がチョコ作りの主要工程となっている。この技術革新を契機として、欧州におけるチョコの生産も消費も拡大していった、と。



▲パラ州メディシランディアのカカオ農園

カカオ/チョコレート経済の大きさ

ざっくりとした数字ではあるが、全世界のカカオ／チョコレート関連経済規模は、原料豆で 500 万トン以上、扱い高（推定）は 120 億ドル、栽培現場や加工場で働く人数は 600 万人以上、と実に大きな経済活動である。ここで、まず、全世界（国別）とブラジル（州別）の最新の生産量を確認しておこう。

①世界の主要カカオ生産国ランキング

FAO（国連食料農業機構）の最新統計（FAOSTAT 2021）によれば、2019 年度のカカオ生産国ランキングは下記の通りだ。（単位：1,000 トン）

1. コートジボワール	2,180
2. ガーナ	812
3. インドネシア	784
4. ナイジェリア	350
5. エクアドル	284
6. カメルーン	280
7. ブラジル	259
8. ペルー	136
9. コロンビア	102
10. ドミニカ共和国	89

②ブラジルの州別カカオ生産量／植付面積（2020 年度）は、

1. パラー州	144,663 トン／ 150,066 ha
2. バイーア州	118,018 トン／ 425,045 ha
3. エスピリトサント州	11,271 トン／ 17,185 ha
4. ロンドニア州	5,069 トン／ 9,208 ha
5. アマゾナス州	1,266 トン／ 1,916 ha
6. マトグロッソ州	366 トン／ 629 ha
（ブラジル全体：280,661 トン／ 604,062 ha）	

全世界へ広がったカカオ栽培

植物学的起源はアマゾンとみられているが、中米を栽培起源とするカカオの栽培地が世界中に広がっていった歴史をみておこう。カカオを中米から欧州に持ち込んだのはスペイン人だが、フランスは 17 世紀中ごろにはカリブ（マルチニークや仏領ギアナ）での栽培を開始している。ブラジルのアマゾン盆地でのカカオ栽培は 17 世紀に始まったが、18 世紀

末の生産量は千トン程度、19 世紀後半で 4 千トンほどだった。アジア地域では、スペイン人がフィリピンへカカオ苗を導入したのは 17 世紀後半で、そこからオランダ人がインドネシアのジャワ島にカカオに持ち込んだのが 18 世紀後半であった。また、アフリカで 19 世紀前半に最初の本格的なカカオ栽培が始まったのはポルトガル領のサントメ・プリンシペ島で、20 世紀初頭には年間 3 万トンも産出していた。現在カカオ生産の主産地となっている西アフリカのガーナやコートジボワールにカカオ苗が導入されたのは 19 世紀中ごろだったが、カカオ農園が本格的に広まるのは 19 世紀末である。

ブラジルにおけるカカオ栽培小史

バイーア州南部にカカオ種子が持ち込まれたのが 1746 年であったが、カカオ栽培が拡大されていったのは 19 世紀後半以降だ。

バイーアでのカカオ生産量は、1845 年 181 トン、1905 年 1.7 万トン、1922 年 5.6 万トン、1935 年 12 万トン、1958 年 18.4 万トン、1971 年 20.7 万トン、1981 年 27.6 万トン、1985 年 36.1 万トンと、1960 年代から 80 年代にかけて急速に増大したが、1986 年 39.7 万トンピークとして、その後激減してしまう。減産の原因は、早魃（1987 年）と病害（1989 年以降フロスティ・ボッド病が蔓延）であったが、1991 年の 25.4 万トンから 1999 年には 9.6 万トンと 10 万トンを割ってしまった。バイーアにおけるカカオ栽培再興の諸努力（品種改良、ハイブリッド苗、アグロフォレストリー農法や有機農法など）は現在も継続中であるが、生産量は、2001 年 15.7 万



◀皮を剥いだカカオ実

トン、2003 年 13.6 万トン、2018 年 12.2 万トン、2020 年 11.8 万トンと、横這い傾向は変わっていない。

このバイーアのカカオ生産量が減少した結果、世界のカカオ生産国ランキングでは、ブラジルはかつての 2 位ないし 3 位から、現在では 7 位にまで後退してしまった。が、パラ州における増産が確実に具現化してきたおかげで近々のうちに 4 位あたりに返り咲く可能性は高い。

パラ州におけるカカオ栽培

アマゾン地域におけるカカオ栽培は 17 世紀に始まったものの、栽培面積や生産量が目に見えるレベルで急増したのは、つい最近の 21 世紀に入ってからである。この略史を追いかけてみよう。

まずは、1970 年代の軍事政権によるアマゾン開発に時計の針を戻す必要がある。

1970 年の PIN（国家統合計画）の目的は、①アマゾンへの移民によるノルデスチ貧困層の撲滅、②広大なアマゾンの防衛、③国家の安全保障、であったが、その国家統合の手段としてトランスアマゾニカと称されたアマゾン横断道路（BR230）を実行工事で開通させる。1974 年には POLAMAZONIA（アマゾン農牧畜・農鉱業開発プログラム）が策定され、パラ州中央部に位置するアルタミラ、メディシランディアといった現在カカオ栽培の中心地となっている町が開拓される。この地名は、当時のメディシ大統領にちなんで命名（メディシの土地という意味）されている。まさに、軍事政権の「目玉開発政策」であった。

この北伯開発計画の一環として PROCACAU（カカオ栽培振興計画）が 1976 年に策定されたが、その目標数字は、10 年間でカカオの栽培面積を 30 万 ha 拡大するというものであった。その 30 万 ha の内訳はアマゾン 16 万 ha、バイーア 14 万 ha となっており、この時点からアマゾン地域におけるカカオ栽培地を増やそうとの発想があったことがわかる。

そうした計画通りにはいかないのがブラジルの開発計画であり、アマゾン地域でのカカオ栽培についても様々な「長めの途中休憩」



があった。そうした段階を経て、実際の生産拡大が具現化してくるのである。

その最大の転機といえるのが、アグロフォレストリー農法の確立であった。周知の如く、胡椒に代表されるモノカルチャー農法が壊滅的な被害を受けたことから、トメアスー農協の人たちが試行錯誤の末、「農業と森林の共生」といえるアグロフォレストリー農法を生み出したのが 1990 年代であった。様々な種類の植物・農作物・樹種を組み合わせる農法が成果を出し始め、そのノウハウをアマゾン近隣地区の農家にも開示したことで、アマゾン地区全般の「持続可能な農業と環境の共存」が農産物収穫量の増加をもたらし始めたからだ。

21 世紀に入ると、ハイブリッド苗の生産・配布を始めとする農家支援体制が、州政府レベルでも地元市町村レベルでも具体化し、これがパラ州全般のカカオ生産量の増加という好循環をもたらししている。

CEPLAC（カカオ栽培計画執行委員会）やパラ州政府の資料に基づいて、パラ州のカカオ生産量推移（単位：1,000 トン）をみてみよう。

1970 年 1.5 ⇒ 1975 年 1.7 ⇒
1980 年 8 ⇒ 1985 年 22 ⇒
1995 年 15 ⇒ 2006 年 36 ⇒
2008 年 52 ⇒ 2010 年 62 ⇒
2011 年 72 ⇒ 2012 年 85 ⇒
2015 年 106 ⇒ 2016 年 86 ⇒
2019 年 130 ⇒ 2020 年 144

となっているので、過去 50 年間で生産量はほぼ 100 倍へ増大したことがわかる。

最近の収穫面積（単位：1,000ha）の推移は、2010 年 80 ⇒ 2012 年 94 ⇒ 2015 年 128 ⇒ 2021 年 188 となっているので、パラ州におけるカカオ栽培が本格化したのは、つい最近といってもよいだろう。

こうしてカカオ栽培主産地へ成長したパラ州は、2019 年にはじめてバイーアを抜いてブラジル最大のカカオ生産州となった。（バイーアの 10.5 万トンに対しパラ州は 13 万トン、翌 2020 年は、パラ州 14.4 万トン、バイーア 11.8 万トン）もう一点注目すべき点は、生産性の高さだ。2020 年のデータによれば、単位面積（ha）当りの生産量は、パラ州の 964kg/ha に対し、バイーアは 277kg/ha であったから、パラ州のほうが 3 倍以上の生産性がある。

パラ州政府としては近い将来の目標生産

◀カカオ豆の天日乾燥場



量 24 万トンという方針を出しているが、恐らく 2030 年ごろにはこの目標を達成するだろうと関係者はみている。

トランスアマゾニカ農協（COOPATRANS）の事例

パラ州政府（農業水産開発局）は、カカオの栽培の成長に比して州内の加工施設（能力）が少なすぎる現状を鑑み、PROCACAU（カカオ栽培推進プログラム）のプロジェクトとしてカカオ加工工場を 6 か所設立し、サプライチェーンの質的向上を図っている。この加工工場には教育訓練機能も付与して“Escola Industria de Chocolate”（チョコレート工芸学校）と命名している。このチョコ技術学校兼工場の第 1 号となったのが、COOPATRANS（トランスアマゾニカ農協）の加工場である。

パラ州中央部のメディシランディア郡に位置する COOPATRANS 農協は、カカオの生産から加工・流通・販売までのサプライチェーンを構築し、高付加価値商品を開発することを目的として 2010 年に設立されたが、現在の組合員数 32 名、カカオ栽培面積 650ha、カカオ生産量約 600 トン（2019 年）、年間売上高約 20 万ドル、となっている。CACAUWAY ブランドで海外（イタリア、オランダ、オーストリア）へも輸出している。いくつかの商品リストをメモしてみよう。

- ①グルメチョコレート・ミルク（カカオ 50%）
- ②グルメチョコレート・カカオニブ（カカオ 50%）
- ③グルメチョコレート・クプアスバター（カカオ 52%）
- ④チョコレート・コナツシュガー
- ⑤ピュアココアパウダー
- ⑥黒糖クランキーカカオ豆
- ⑦チョコレートトリュフ

筆者は上記の 7 つのサンプルを試食する機会があったが、ベルギー製高級チョコと比しても全く遜色ない、クオリティーの高さには驚いてしまった。こんなオシャレなチョコレートがアマゾン内陸部で生産されている。これもブラジルのポテンシャルパワーを証明する一品だ。



◀Cacaaway ブランドチョコレート



Projeto de Intercâmbio, Cooperação e Geração de Negócios dos Agricultores Nikkeis da América Latina
Ministério da Agricultura, Silvicultura e Pesca do Japão

農林水産省

「中南米日系農業者等との連携交流・ビジネス創出委託事業」



松尾有紀
(中央開発 様)
グローバルセンター

農林水産省では、2013年度より中南米、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア及びペルー5か国の日系農業者を対象に日本及び中南米国間での連携を強化するための支援事業を行っている。本事業を中南米諸国に関わる方々に広く知っていただくため、これまで弊社が行ってきた本事業の内容を以下に紹介する。

【本事業の目的】

農林水産省が行う中南米の日系農業者を対象とした事業は、本事業が始まる2013年度以前にも行われており、10年以上の歴史がある。その主な目的は、過去に国策として実施された移民政策のフォローアップと食料安全保障を念頭においた、世界の食料市場への一大供給地域である中南米の国々で活躍する日系農業者との良好な関係を維持・強化するためとなっている。



【事業対象となる日系農業者団体】

2021年度での国別参加農業者団体は合計45の団体から参加があったが、その6割以上はブラジルからの参加となっている。ブラジルからの参加団体の内訳としては、主にコチア産業組合、南伯農業協同組合中央会解散後の個々の農業協同組合が多く、主な農業生産物は野菜、果樹が主流となっている。また、2020年度からは新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、本事業もほとんどの内容を

国名	参加団体数
ブラジル	29
アルゼンチン	3
パラグアイ	7
ボリビア	2
ペルー	2
メキシコ	1
コロンビア	1
合計	45

オンライン形式で実施してきた。本邦研修など国間移動を伴う事業が実施できなくなったが、一方で事業対象範囲を中南米全体に広げ、メキシコ(榎本殖民団の末裔)、コロンビア、個人としてはウルグアイからも参加が得られた。

【事業内容】

本事業の主な内容は、1) 中南米日系農業者等の連携強化会議、2) 研修・セミナー、3) ビジネス創出セミナー、及び2020年度より加わった4) グローバル・フードバリューチェーン(GFVC)関連会合の開催、の4つで構成されている。各イベントに参加した延べ人数を下表に示すが、上述したように2020年度、2021年度はオンライン形式での実施でより多くの中南米日系関係者が参加できるようになった。

2013年度から2021年度の参加延べ人数		
日系農業者等連携強化会議		1,411
		4,272
研修	本邦研修	139
	現地研修・専門家派遣	3,066
ビジネス創出セミナー	参加企業数	58
	参加人数	673

日系農業者等連携強化会議は、主に交通の便の良いサンパウロに各国農協等団体幹部が集まり、それぞれの課題について意見を交換し合う場である。それまで交流のなかった国々の日系農業者が直接意見を交換し、会議を契機に、解決策の模索と交流の発展として相互の国の現場を視察するということも行われてきている。

研修は、事業の初期では現地の希望する技術的な内容をテーマとするものを主として実施してきたが、徐々にビジネス創出の要素を加味して実施するようになってきた。野菜、果樹関係の技術に関しては、まだまだ日本に学ぶことが多くあるという。近年では、ビジネス要素も取り込み、来日したタイミングで業務上抱える問題解決のため、直接日本企業との面談、商談を行う機会を設けることも行っている。本邦研修の特徴として、参加者は日系人に限らず、日系団体に属する非日系の方でも参加できるように、また言語が参加を躊躇させることがないように全行程に通訳

を配置している。加えて本事業全体においても、参加を希望する人は日常日系団体とのビジネス的な関りがあれば、非日系の方へも広く門戸を開く方針で行ってきている。

ビジネス創出セミナーは、元々現地からの意見として、是非ビジネス要素も加味してほしい、との希望をくみ取った形で生まれた事業である。コロナ禍以前の2019年度までは、中南米諸国とのビジネスに関心のある日本企業を募り、現地ニーズを把握するため、実際に現地視察を行ってもらう形を取ってきた。コスト、現地エージェント、関税などの課題により成約までになかなか至らないが、その中でも本事業がきっかけとなり、小型移植機、剪定鋏のような農機具、土壌改良剤などの商談が少しずつ進んでいる。

その他、GFVC関連会合は、中南米諸国とのビジネスに関心のある日本企業に対して情報提供をする趣旨で会合を開催してきた。しかし、本事業ではオンラインでのみの開催であり、2019年度以前に行われていたような、相手国との対面での会合の再開が望まれるところである。

本事業を実施してゆく間に周辺環境は大きく変わってきた。特に農林水産省が推し進めるGFVC構築政策とそれに続く農林水産物・食品輸出促進事業は、本事業の方向性への新たな羅針盤となりつつある。一方、欧米等の資本が多く入り、各企業がしのぎを削っている中南米での農業ビジネス参入、継続には日系社会の存在は重要である。10年近く行われている本事業には相当量の情報がストックされており、参加農業団体のデータベースも構築している。今後、中南米への農業ビジネス展開を検討する上で、これらを利用しない手はないと思う。是非一度、本事業のホームページを覗いていただければ幸いである。

<http://www.nikkeiagri.jp/index.html>



滋賀県から見える ブラジル像



岡崎駿輔
(滋賀県庁職員)

「採用試験に落ちてしまった。あれだけブラジルに関わりたかったのに、外交官になってブラジルと日本の懸け橋になりたかったのに…」、そんな思いの中、私の社会人生活はスタートした。大学でポルトガル語を専攻していたこともあり、ほかの多くの学生がそうであるように外務省専門職を志したが、なかなかどうしてうまくいかず、結局第2志望であった滋賀県庁に入庁した。ここ滋賀県は私の生まれ故郷であり、そんな地で公務に勤しめることはまったくもって贅沢なことだったが、当時はやはり第1志望の外務省に落ちたことが悔しくてたまらなかった。

さて、皆さんにとって滋賀県とブラジルというと、なかなか接点がいまい浮かばないのではないだろうか。日本でブラジル人が多いと言えば東海・北関東あたりだし、こんな琵琶湖くらいしか思い浮かばないところにBrasília(ブラジラシ)はあるのかと、疑問に思うことだろう。ところが、滋賀県のブラジル人の人口は全国第4位であり、その数は実に8,966人(令和3年12月時点)に及び、県内における外国人住民の内でも最も高い割合(27.5パーセント)を占める。そして県内における分布を見てみると、興味深いことに湖の東、つまり長浜市(1,678人)、甲賀市(1,630人)、湖南市(1,456人)および東近江市(1,539人)に集住しているのだ。この理由としては、湖東地域に名神高速道路が縦貫しており、その輸送の便を活かした軽工業産業が発展し、多くのいわゆる出稼ぎ労働者が集まるといことが挙げられる。こういった集住地においては、ブラジル産食材を扱うスーパーマーケットやブラジルレストランといったエスニックビジネスが発達しており、ブラジル人学校やエヴァンジェリコ(福音派)関係の教会も存在する。私自身、県内のそういったスーパーやレストランを渡り歩き、そのことならいく

とブラジルの所縁を簡単に紹介したい。明治時代における日本からの海外移民の増加期にあって、滋賀県民が目指した第1の目的地はカナダであった。滋賀県の統計資料によると、1898～1926年の間で、滋賀県からは実に14,399人が(その多くは出稼ぎ労働者として)海外に渡った。そのうちカナダ移民が7,602人、アメリカ移民が3,493人であるのに対し、ブラジル移民はわずか196人に過ぎない。ブラジルへの移民が非常に多かった沖縄や広島と比べると、この時点では滋賀県とブラジルの関係性(そもそも当時は県単位で他国とのつながりを考える意識はなかったと思うが)は弱かったと言える。明治―昭和間は数としては少ないものの、滋賀県からブラジルへ渡るのみであったといえよう。そして平成が近くなると、1989年のバブル景気と1990年の入管法改正により、単純労働力としての外国人に対する需要が高まり、かつ日系ブラジル人が合法的に就労できる素地が固められたことにより、滋賀県内におけるブラジル人人口は爆発的に増加し始めた。

一方、県内におけるブラジル人増加に先立って、滋賀県はブラジルのリオグランデ・ド・スル州と1980年に姉妹都市交流を結んだ。姉妹提携を記念して滋賀県からリオグランデ・ド・スル州には日本式庭園「ブラッサ・シガ」が寄贈された。(ブラジル留学中にリオグランデ・ド・スル州州都のポルトアレグレを友人と観光していた際に、たまたまこの公園に出くわし非常に感動した。)両県は、教員や高校生の相互派遣交流事業、ブラジル式大規模農園法の実習に向けた滋賀

県職員派遣、水産技術向上を目指した技師の相互派遣実施や県知事と州知事が相互に表敬訪問しようといった取り組みを通じて関係性を深めている。

令和4年4月現在でも、ブラジルからの国際交流員が滋賀県庁に勤務しており、コロナウイルス関連の県広報の翻訳や、県知事がブラジル人学校を訪問する際の随行といった業務にあたっている。(彼曰く、琵琶湖は故郷リオグランデ・ド・スル州のバトス湖(面積は琵琶湖の15倍)を思い出させてくれ、気持ちや和むそうである。)

こうしてみると、滋賀県とブラジルの関係がいかに深いかかわかると思う。よく考えてみると、日本とブラジルの2つの土地の間にかかる架け橋になるという私の目標は達成できなかったが、この日本の中にある小さなブラジルにかかる「橋」になることはできるのではないだろうか。行政側の人間として、ブラジル人を含む外国人住民が抱える問題は、行政手続、教育の場、医療現場、そして社会福祉と多岐に及んでいることは実感している。ならば、そういった一つ一つの課題に対し、県というスケールの中で何ができるかを検討し政策として実行することが自らの使命であると感じている。



▲ポルトアレグレの公園

Make Your Life GOSTOSO ①



REI CAPOEIRAP
(音楽プロデューサー)

南パイアにて

パイア州ポルトセグーロの飾り気のない大衆食堂。安さが売りのPF(プラトフェイト＝定食)の看板に釣られて入った。小さな入り口から階段を登ると海が臨める。おひとり様ムケッカをオーダー。片隅の大きなテレビではJammil e uma noitesのライブ映像が流れている。”Sou Praieiro, Sou Guerreiro,Tô solteiro, Quero mais o quê? ♪” 大好きな一曲、『Praieiro』。群馬県大泉町のカラオケバーで必ず歌う自分のレパートリーでもある。ブラ飯を食べながら,” Porque eu sou brasileiro ♪” サビの部分で一気に涙腺が崩壊して涙が滝のように溢れ出た。

一度冷めかけた愛が蘇っていくような感覚だった。1月中旬にブラジルに来て2ヶ月以上が経っていた。

恋は盲目。六度目の渡伯でこれまで見ていなかったブラジル、カポエイラを始めた大学時代からおよそ20年、ずっと好きになってから敢えて見てこなかったブラジルがあった。

貧困

1月24日にバーハダチジュカでコンゴ人のモイゼさんがリンチ殺害された。雇い主の海沿いのバーで未払いの給与200リアルをめぐっての事件だった。また雨の被害でリオデジャネイロ州ベトロポリスでは多くの家が流され多くの人々の命が奪われた。サンパウロに続いて貧困層の民家に起きた被害だった。そんなニュースをサンパウロの友人宅でもカポエイラのメストレの家でも連日、目にしていた。Chuvras de verão. 夏の雨は激しく、サンパウロでは中心部でも車が流されていたし、リオに来てからカポエイラの道場でも稽古中に幾度となく雷が轟いた。

Itaguaí リオ州イタグアイー

東京の自宅で制作した新しい曲2曲をブラジルに持ってきた。バンドミックが始まる前に制作した『Baile de Tokyo』と同様にミュージックビデオを撮影するために今回も渡伯した。『Bum Bum Bom Bom』はリオで『Make Your Life GOSTOSO』はサンパウロで撮影することにした。

1月にサンパウロで『Make Your Life GOSTOSO』のボーカル録りを終えたので、2週間カポエイラの稽古のためにリオデジャネイロ州イタグアイー市にやって来た。この後さらにサンパウロとリオの往復を3回も繰り返すとは夢にも思っていなかったが、1月には必ずマスク着用が義務付けられていたスーパー GUANABARA も3月にはマスクを外して入ったり、1リアル20円ぐらいだったブラジルリアルも25円に上がったり、と変化があった。

カポエイラのメストレの家があるイタグアイーはセントロから約2時間、リオデジャネイロでは初めての日本人入植者が辿り着いた場所だ。自分にとってもカポエイラをきっかけに19年前に初めて訪れたブラジルなのだ。コロナ禍で注意しながら通っていた群馬県大泉町で、いつも意識的にポルトガル語で会話をするようにしていた甲

斐もあって、サンパウロとは違うカリオカのポルトガル語やふざけておちょくってくる連中との会話も昔に比べたら耳に入って楽しめている。それでも勉強が嫌いで、音楽と同様に相対音感で語学を学ぶ自分には、まだまだ山ほど足りないボキャブラリーがある。日々覚えては使ってみて忘れての繰り返しだが、楽しく生きたポルトガル語に触れている感覚がある。

カポエイラ修行から始まったブラジル、地球の向こう側で家族のように接してくれる温かさに初めて触れた感動は忘れられない、東京での暮らしで忘れてしまっていた大切なものと呼び起こしてくれた。そんなブラジル人をより理解するためにポルトガル語も覚えた。そして現在は日本とブラジルをクロスオーバーさせた新しい音楽を創っている。

お金がなくても笑って飲んでよく喋って精一杯、人生を楽しんでいる。そんな彼らにいつも元気をもらってきた。日本人として自分の国でも楽しく暮らしたい、日本をもっと好きになりたいんだ、ってことに気がついた。

実はこの2ヶ月間で様々なことが重なってブラジルに疲れてしまっていた自分がいた。良いところ悪いところも含めて。

それでもブラジルが好きなんだ

涙が1時間ぐらい止まらなかったものだからちょっと恥ずかしくなってサングラスをかけて港からの風が気持ちいい居心地よかった店もあとにした。

まるでカレーライスのようなおひとり様ムケッカと600mlのセルベージャと水で38リアル。正直、味はふつーだったし接客サービスも自由な感じだ。カラリーパで食べたグツグツ煮えたムケッカやアハイラルダアジュダで高価でお洒落なレストランで食べたピッカーニャの方が遥かに美味しかったけど、ここで見つけたフツーな素朴さと爆音でかかるライブ音源に感動が止まらなかった。”Porque eu sou brasileiro ♪” 純日本人だけど、俺も”ブラジル人なんだ”って歌いたい。やっぱりブラジルにまだ恋をしている自分がいた。人生色々あったけど今日まで生きてこれたのも頭の中でずっと止まらない新しい音楽とブラジルへの愛と憧れがあってこそだ。

Vida Boa 美味しい人生

港に突き出たテーブルで不意にカイピリーニャが飲みたくなった。ブラジルの旗が風に靡いている。俺はどこを目指していくんだろう。

素直に自分らしく人間らしく生きるためにそんな自分チャージするためにもまたブラジルに戻ってくるのだろう。

まだまだ見てないブラジルを知りたいし新しいアミーゴたちとも語り合いたい。

カポエイラ稽古から離れ、ビールとブラ飯三昧でぼっちゃんりしてきたお腹を気にしてなぜだか砂糖少なめにしてみたけど、カイピリーニャは甘いのが好きだ。人生を美味しく、”Make Your Life GOSTOSO”



Mitutoyo Sul Americanaの歴史と5年間の駐在生活



齋藤裕介
(株)ミットヨ 商品販売戦略部次長)

ブラジル創業の歴史

現在、株式会社ミットヨは世界でも有数の精密測定機器総合メーカーであると自負している。モノづくりに欠かせない測定機器及びサービスを80年以上も世の中に提供してきた。その歴史の中には様々な困難があった。創業者は関東大震災や第二次世界大戦の経験から、いかなる天変地異が発生しても当社の灯を途絶えさせるまいと考え、日本から最も遠い地に目を向けた。その中でブラジルの勤勉な日系移民たちに心を打たれ、この地に第二のミットヨを建設しようと決めた。それがMitutoyo Sul Americana(以降、南米ミットヨ)の始まりである。日系移民が多く暮らしているスザノ市に工場を建設し、1974年に創業を開始、当社としては初の本格的な海外工場として、生産品目を年々拡大していった。米国への輸出を開始するも、オイルショックの発生と重なるという厳しい船出であった。それでも政府による国内産品への優遇政策は、輸入に頼る競合他社に対する優位性を長年に渡ってもたらし続けた。

ブラジル勤務

そのような背景のある現地法人へ赴任を命じられたのは2014年。母校・東京外国語大学ではポルトガル語を専攻し、採用面接の段階からブラジル赴任を希望していた身としては、最初の海外赴任命令がメキシコであったことに当初落胆をしつつも(結果的にメキシコ生活も最高!)、入社約15年でのブラジル・サンパウロ赴任実現に心躍らせた(家族の説得はやや難)。サッカーワールドカップ・ブラジル大会の開催年でもあったその年は、資源バブル終焉、ペトロbras大汚職発覚、国家財政難等々で国が揺れており、日々デモが繰り返されていた時期と重なる。夜にはバネラッソの音が響き渡り、明るいお祭り騒ぎに向かう気持ちになれない、そんな時期。その後も経済は悪化の一途を辿り、硬直的な労使関係や人件費の高騰に我々製造業は悩まされ、どうすれば利益を生み出せる会社に生まれ変わるか?? 考えさせられる日々が続いた。家族のおかげで家庭では幸せであったが、職場で



現在の会社入口正面

は心が荒れていたように思う。

言うまでもなくサンパウロ生活において家族の存在こそ最大の心の拠り所であったが、それとは別に小さな楽しみも幾つかあったものだ。1つはブラジルの音楽を楽しむ。夜な夜なライブに繰り出したり、カーニバル会場で歌いまくれば、日々のストレスは飛ぶ。もう1つはハンバーガー。サンパウロは大都市だけあって、美味しいレストランは数多くある。どこで食べてもシュラスコは美味しい、ムケッカは芸術であるし、ラーメン店の出店ラッシュに家族は喜んだものだ。それでも私はハンバーガー派。肉とチーズの質が世界トップクラス(私の基準で)なのだから必然でしかない。私の密かな楽しみはストレスと表裏一体で、表はサンパウロ市街の渋滞とホジージョ制度(自動車運転可能な時間帯と区域の制限)というストレス、裏では制限区域外でのパン屋探索! アタリのパン屋をGoogle Mapにマーキングするのが楽しみであった。ピッカーニャやモッツァレラチーズは日本でも食べられるが、サンパウロのパン屋風ハンバーガーには未だ出会っていない。あれば是非教えて頂きたい。

南米ミットヨの現在

小さな楽しみとは裏腹に、政情不安は続き、経済も上向かない中で、当社は大きな変革を実行に移し始めた。17年サンパウロの販売拠点を閉鎖し、スザノ市の生産拠点へ販売部門を移し、これを統合。様々なコストの削減が実現した。消費者の購買意欲が少しづつ戻り始めた頃、eコマースが国全体で勢いを増し、代理店ビジネスと自社営業で発展してきた当社も遂にMarketPlaceというプラットフォームを構築(南米ミットヨHP参照)。移転という決断が旧時代一掃し、社内に若くフレッシュな風を呼び込んでいた。

18年末、日本への帰任命令を受けて帰国の途に就いた約1年後、もう一段の大きな決断が行われた。南米ミットヨのスザノ工場は四十数年の役割を終え、閉鎖の道を選んだ。販売とサービスへの集中を選択したのだ。工場の生産立ち上げには多くの先人たちが日本からやってきて、日本の技術で歴史をこの地に築き上げてきた。私自身も寂しい気持ちはある。しかしこれは前向きな変革に他ならない。生産に振り分けていたリソースを全てお客様の為に捧げ、Made in Japanの商品とサービス力で南米の発展に貢献していくという決意でもある。新型コロナに負けず、力強い企業に生まれ変わりつつあるその様を、遠い日本からサポートする日々が続いている。ブラジルの仲間たちと、そしてピッカーニャとモッツァレラチーズを恋しく想いながら。。。



スタートアップ法の成立



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)

1. スタートアップを取り巻く環境

スタートアップへの投資は、ブラジルにおいても非常に関心が高く、実際に国内外から多くの投資が行われている。ブラジル政府も、2000年代からスタートアップの事業展開やスタートアップへの投資を促進する法律や制度を設けてきた。具体的には、2006年には小規模会社の税制を簡素化するシンプレス・ナシオナウ (Simples Nacional) と呼ばれる制度が創設され、2016年には参加契約 (Contrato de Participação) というエンジェル投資家による投資を容易にするための新しい投資形態が創設された。そして、2019年に制定された補足法 167号 (Lei Complementar nº 167/2019) において、初めて「スタートアップ」という概念が明確に規定され、また、同法に基づき、「Inova Simples」という会社の設立や清算、知的財産の登録などを簡易化する制度が創設された。そのような流れの中で、2021年6月にスタートアップ法と呼ばれる2021年補足法 182号 (Lei Complementar nº 182/2021: Marco Legal das Startups) というスタートアップの事業環境やスタートアップへの投資環境をさらに改善及び促進するための法律が制定された。スタートアップ法は、スタートアップに関する新たな制度を創設したほか、会社法の改正も行っているが、本稿ではスタートアップに関する内容を紹介する。

2. スタートアップの定義

スタートアップ法で定める「スタートアップ」に該当する企業は、同法に基づく新制度を享受できる。「スタートアップ」は以下の要件を満たす企業である。

- ①前年度の売上げが、1,600万レアル以下（設立12か月未満の場合は月に1,333,334レアル以下）であること
- ②法人登録番号 (CNPJ) 取得後10年以下であること
- ③以下のいずれかであること
 - a. 2004年法 10973号第2条本文4号に規定される製品又はサービスを作り出す革新的なビジネスモデルを利用することを定款に記載し、かつ、実際に利用すること
 - b. 「Inova Simples」制度における会社であること

3. スタートアップ企業に関する新制度

(1) スタートアップへの投資を促進する制度

スタートアップ法は、株式購入オプション (Contrato de Opção de Subscrição de Ações)、転換社債 (Mútuo Conversível) など、投資時点においては株式を取得しない投資形態において、投資家が会社の債務について責任を負わないことを明確にした。株主は有限責任であるため会社の債務について責任を負わないのが原則であり、ましてや株主になってもないこれらの投資家が会社の債務に責任を負わないのは当然のように思えるが、ブラジ

ルの裁判実務ではこれらの投資家も特に労働債務について責任を負われる可能性があった。スタートアップ法は、スタートアップへの投資を促進する目的で、これらの投資家が会社の債務について責任を負わないことを明確にしたのである。

(2) 研究開発の代替手段としてのスタートアップへの投資

公的機関との契約等に基づき研究開発への一定の投資が義務付けられている会社が、プライベートエクイティファンドなどを通じてスタートアップへ投資することでかかる義務を履行できることになった。

(3) 規制のサンドボックス制度

いわゆる規制のサンドボックス制度が創設され、規制がある分野において、本来必要な手続に従うことなく、規制当局から一時的な認可を受けることで革新的なビジネスモデルの開発や実験的な技術の実施をテストすることができるようになった。なお、スタートアップ法施行前に同様の制度をすでに採用している規制当局もあったが、スタートアップ法の施行により、かかる制度に法的根拠が付与されることになった。

(4) 特別の公共入札制度

行政が抱えている問題を革新的な技術を用いて解決することを目的とする特別の入札制度が創設された。同制度では、たとえば、行政機関は、入札対象業務の範囲を限定することができ、また、正当な理由があれば公共入札法 (1993年法 8666号) で要求される資格等に関する書類の提出や受託業務に関する保証の提供を免除することができる。また、契約者の選定は、価格だけではなく、問題解決やコスト削減の可能性、提案された解決策の開発の程度、提案された解決策の実現可能性なども考慮されるため、価格面で不利になりがちなスタートアップ企業でも選定される可能性がある。

4. 小規模会社のキャピタルマーケットへのアクセスの容易化

スタートアップ企業に対する新制度のほか、小規模会社 (Companhia de Menor Porte) に対する新制度も創設された。具体的には、小規模会社がキャピタルマーケットにアクセスしやすいように会社法を改正し、株主の請求に基づく監査役会の設置義務、公募増資における金融機関を仲介させる義務等が免除された。

5. スタートアップ法の成立過程で削除された項目

スタートアップ法の成立過程で、いくつかの項目が削除された。そのうちの一つは、スタートアップ企業への投資に関するキャピタルゲイン課税の計算に際して、投資の損益を相殺する制度である。削除された条項については、今後法改正等で復活する可能性がある。

2022年度における直近の税制動向 Part2



三上智大
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)



天野義仁
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
責任者)

工業製品税 (IPI) の適用時期の延長

2022年3月31日、連邦政府は政令 11,021/2022号を発表し、IPIの新たな税率表 (TIPI) の適用時期を延長した。この延長により、新しいIPIの税率は2022年5月1日から適用となる。

留意事項として、GECEX決議第 272/2021号により「HSコード 2022年度版」での変更点を反映するためにメルコスール共通関税コード (NCM) の変更を含む対外共通関税 (TEC) の新しいフレームワークが2022年4月1日に発効されている。TECとTIPIは、特に外国貿易取引に関わる場合、その適用及び課税に関して、連動して機能するべきである。しかし、TIPIのみが適用を延長されたことにより、HSコードの改訂によって新設されたNCMコードに対して適用されるべきIPIが不在となり、税関業務に支障が生じる懸念があった。

当該懸念を解決し、状況を改善するべく、連邦政府は2022年4月1日に、GECEX決議第 272/2021号により新設されたNCMコードに適用されるIPIレートを定義する税務当局による行政執行第2号を公布し、同日に発効した。

法的条文: RESOLUÇÃO GECEX Nº 272, DE 19 DE NOVEMBRO DE 2021, DECRETO Nº 11.021, DE 31 DE MARÇO DE 2022, Novas alíquotas de IPI para os NCM incluídos na Resolução Gecex nº 272/2021, ATO DECLARATÓRIO EXECUTIVO RFB Nº 2, DE 1º DE ABRIL DE 2022

最長60ヶ月での新たな分割払いを可能にする規範指令を発表

2022年1月31日、ブラジルの連邦歳入庁 (RFB) は、同局に対する債務について当該制度の申請を行う時点で支払期限が超過している債務に関して分割払いを認める規範指令第 2,063/22号を公布し、同日に発効した。

また、過去に適用を受けた分割払い制度について、適用を取り消す若しくは債務を再分割することについても当該規範指令に規定されている。

なお、債務の減額の規定はなく、当該制度の恩典は分割払いに留まる。各分割払いの金額には、当該制度を利用した翌月から支払月の前月までの月割計算によるSelic利率相当+1%の利息が加算される。

法的条文: IINSTRUÇÃO NORMATIVA RFB Nº 2.063, DE 27 DE JANEIRO DE 2022 - DOU - Imprensa NacionalNST

ブラジルでは2022年10月に大統領選を控えている。一般的には、大統領選が行われる年については税制改正の議論は停滞する傾向にあり、2022年4月1日現在、法人所得税の引き下げや配当課税等に関する議論は2021年9月の下院通過以降、進展がない状況である。

一方、年明け2022年1月にはOECD理事会がブラジルのOECD加盟に向けた協議が開始したことが発表され、同年3月にはOECDルールを適用すべく行われた金融取引税 (以下、IOF) の引き下げに関する税制改正等もあり、今回はIOFの引き下げをはじめとした直近の税制改正について紹介する。

IOFの引き下げ OECDルールへの移行を目指すブラジル

2022年3月15日、連邦行政府は、IOFを規定する政令 6,306/2007号を改正する政令 10,997/2022号を公布した。政令 10,997/2022号により、外国為替取引に適用されるIOF税率は段階的にゼロになる予定である。

政令 10,997/2022号で導入された修正のうち、ブラジルへの資金流入に最も関連性が高いのは、外国からの融資であり、2022年3月16日以降、融資の平均期間に関わらず、IOF税率は0%が適用される。

2022年1月に、OECD理事会はブラジルと加盟協議を開始することを決定している。政令 10,997/2022号によって導入されたIOF税率の引き下げは、ブラジル政府がOECD加盟のプロセスの中で採用しなければならない施策の一つである。今後、OECD加盟に関して、他の政令の変更も続くと予想される。

以下は、IOFの段階的な引き下げをまとめた比較表である。

IOF 税率			
取引	現行税率	改正税率	適用開始時期
海外融資 - 資金流入 (平均期間 180 日以下)	6%	0%	2022年3月19日
為替取引を伴うクレジットカード、デビットカードによる取引 為替取引を伴う海外での現金引き出し 為替取引を伴う旅行小切手・プリペイド国際カードによる外貨の取得	6.38%	5.38%	2023年1月2日
		4.38%	2024年1月2日
		3.38%	2025年1月2日
		2.38%	2026年1月2日
		1.38%	2027年1月2日
		0%	2028年1月2日
外貨の現金での取得	1.10%	0%	2028年1月2日
送金者が海外で保有する口座への国際送金	1.10%	0%	2028年1月2日
上述のケース以外の一般的な為替取引	0.38%	0%	2029年1月2日

法的条文: DECRETO Nº 10.997, DE 15 DE MARÇO DE 2022



宮下ケレコンエリカ
(ブラジル映画愛好家／
元ブラジル映画祭実行委員)

ブラジル映画 心に残るワンシーン 『Árido Movie』(2005)



みなさんは、ある映画が、あるワンシーンのためだけに存在していると感じたことはあるだろうか。そのシーンに出会えたことが特別な意味を持つように思える映画、『Árido Movie』は私にとってそういう映画だ。

リリオ・フェレイラ監督（共同脚本）の『Árido Movie』を見たのは15年くらい前のこと、ブラジル映画を観漁っていた頃だった。ストーリーはというと、壊滅的にほぼ覚えていない。だが、あるシーンだけは脳裏に焼き付いている。あるものが静かにスクリーンに現

れた時には鳥肌が立ってしまった。（※これ以降は完全なネタバレになるので、興味のある方は本編をご覧ください）

それは、ノルデスチの荒野のシーンだった。インディオの風貌の中年男性と主人公の男が高台から乾いた大地を眺めていて、インディオの男性が主人公に語りかける。

「君に分かるかな。私たちは、すぐそこにある物事を見ることができない、……というより、理解できないでいる、ということよ」

カメラは、インディオの男性の視線の先にある岩を捉える。ゴツゴツした岩だ。男性は、その岩は犬の形をしていると言う。でも私にはただの岩にしか見えないう、それはきっと主人公にしても同じだ。カメラはゆっくりと右方向にスライドし、岩を見ている主人公の背後にまわる。視界から岩が消え、スクリーン上には主人公の白いシャツしか映らない。その間、インディオの男性は岩の描写を続ける。

「ほら、見えるか？ こちらの背を向けておすわりをしている犬だよ。顔を横に向けている」

カメラが右へスライドを続けると、主人公の白いシャツの向こう側にさっきの岩が再び姿を現す。目隠しの白いベールが外されて改めて岩を見直す感覚だ。するとどうだろう。それまで岩にしか見えなかった岩が、確かに“横を向いておすわりをしている犬”の姿に見て取れるのだ。“見えなかった”ものが“見えるようになる”瞬間を、カメラを通して、主人公と同時に体験してしまった。

インディオの男性のセリフは続く。

「その岩はいつだってそこにあった。犬が存在し始めるずっと以前からそこにあった。でも私には犬には見えなかった。ほら、あれが犬の岩だよと言われても、犬には見えなかった。それなのに、“おすわりしている

犬だよ」と言われた瞬間、もう犬にしか見えなくなったんだ。そこに犬を見ずにいられたことが信じられない」

私にも、もう犬にしか見えない。

「分かるかい？ すぐそこにあるというのに、私たちは見抜けない。なぜか分かるかい？ 先入観だ。人々は見せられるものを見たいだけなんだ。怠惰と偏った見方のせいだ」

ああ、そう、そうなのだ。私たちの目は時として節穴で、見えていないものを見ているように錯覚したり、見ているつもりが実際には見えていなかったりする。さらに言えば、自分の見解が、どこか誰かの言説をなぞっているだけということもある。そして物事を分かったつもりでいるから、立場が変わればまた別の見方があることに寛容でいられなかったりする。

「だからハウル・セイシャスが好きなんだ。固定観念を持ちたくない」

ブラジリアン・ロックンローラー、ハウル・セイシャスの代表曲の一つ『Metamorfose ambulante（終わりなきメタモルフォーゼ）』を念頭においたセリフだ。この曲の歌詞の通り変革の人であったハウル・セイシャスは、自らが常に変態することで世界の意味を捉えようとした。ここで彼の名を出すのも憎い演出だ。

この後、カメラは周囲360度を見渡すかのように右に回り続け、“犬の岩”のほかにもう一つ別の岩を映し出す。そしてその岩もあるものに見えてくるのだが……

それについてはみなさんに映画を観ていただくとして、ここで私が書くのはやめておこう。

最後にもう一つ。このシーンに惹きつけられる理由は、3分21秒間のワンシーンがワンカットで撮られているという点にもある。いや、本当にワンカットで撮影されたのか、それとも巧みな技法によってそれらしく見せているのか、実のところは分からない。でも実際にワンシーン・ワンカットで撮影が行われたのであれば、カメラが捉える周囲360度の射程圏内に二つの神秘的な岩が存在していること、それが奇跡だ。

一体どうやって、こんな最高のロケーションにノルデスチの広大な土地で出会うことができたのだろうか。これらの岩の存在が先にあって脚本が生まれたのか。それとも脚本ありきでその後にそれに見合う風景を探し出したのか。それともそれとも、そういう岩は実は私たちの周りに幾らでもあるというのに、私たちには見えていないだけ、なのだろうか？

ブラジル日系社会 出会いと別れ

中島 昇（NHK BS国際報道・編集責任者＝元リオデジャネイロ支局長、元サンパウロ支局長）

リオデジャネイロに赴任したのは2004年。18年前のことで、当時はルーラ大統領の就任にともなう経済的な不振から立ち直り、ブラジル経済が上向きになり始めていた時期だった。ポルトガル語も分からず、ブラジルのいろはも知らなかった私にとっては、初めてのことばかり。初日に連れていってもらった「ボルコン」でシュラスコを初めて体験。肉だけでなくクレミ・ジ・パパイアのおいしさもびっくりしたものだ。

ブラジル初心者の方にとって、日系社会は非常に心強い存在であった。初めてのサンパウロ出張は、新潟県人会が中越地震を受けて行う募金活動をリベルダーヂから生中継するというものだった。その時、南米に広がる日本語の行きかう不思議な空間に鮮烈な印象を植え付けられた。街角での行商の日系の女性たち。さらに日本語の理髪店と、こうしたものまであるのかと驚きの連続だった。背景に戦前から続く多くの日本人が移住し、計り知れない苦労があったのを知り、胸が熱くなった。

その後、NHKの支局がリオデジャネイロからサンパウロに移ることになったのだが、理由のひとつが日系社会への取材の充実だった。サンパウロ移転にともないお世話になったのがブラジルのテレビ局「バンデランティス」。特に社長補佐のネウザ・柿木さんには多大な支援をいただいた。このサンパウロ移転にともなってブラジル日本文化協会をはじめとした日系団体、日系企業、日系人のかたには、若輩者に公私ともどもいろいろと教示していただき、本当に助けられた。そのころ、NHKのドラマ「ハルとナツ」が放送されたのも、日系社会を取材するうえでは、非常に役に立ったものだった。ブラジルでのロケには女優の米倉涼子さんも訪れ、東山農場で撮影が行われた。のちに、バンデランティスの柿木さんの協力もあり、ブラジルでも放送されることになった。

この時期の取材で印象的だったのは、戦後29年を経てフィリピン・ルバング島から日本に帰還した小野田寛郎さんの取材だった。ブラジルに移った小野田さんが切り拓いた牧場に泊まり込み、彼の話を十分に聞くことができた。ブラジルに来られたいきさつの中で、アントニオ猪木さんとの関わりについても話がでて、2人のつながりの裏話も聞けて、記者冥利につきるものであった。インタビューの中でいまでも頭に残っているのは「人は1人では生きられ

ない。フィリピンでも地元との関わりがあった」と話していたことだった。

29年間も孤立した中で生き延びてきたことから、一人でも生きられると言うのかと思っていたのだが、フィリピンでは時折、村に忍び込み、食べ物や物を盗んでくることがあり、そこに人とのつながりを感じていたという。極限を体験した人の話だけに妙に納得したことをいまでも覚えている。取材が終わり、近くの飛行場まで送っていただいたのだが、空港では軍隊式の敬礼で見送っていただいた。地元の人々やブラジルの軍人からも尊敬を集めていた小野田さんを「最後の日本兵」と感じた瞬間だった。

こうして取材させていただいた方々たちと「別れ」が相次いでいる。小野田さんは亡くなられて久しいし、先の柿木さんは去年7月、ガンにより66歳で他界された。出会って17年、仕事だけでなく、家族ぐるみの付き合いをさせてもらい、公私ともにお世話になりっぱなしだった。いわば、私のブラジルの母のような存在だった。

大手テレビ局の中核で長年働いてきたことから、ブラジル各界に幅広い人脈を持っていたほか、日系3世にもかかわらず日本語に堪能なうえ、日本文化に親しもうと、カラオケや俳句などをたしなみ、明るいい人柄で周囲の人を楽しませ、ブラジル社会と日系社会の懸け橋的な存在だった。こうした人が日本とブラジルの関係を草の根から支えていると思っていたので、今後も末永く活躍してほしい、活躍していくと信じていた。それだけに、残念としか言いようがない。

画家の若林和男さんもその一人で、去年12月に亡くなられた。リオで行きつけの日本食レストランでたまたまお会いしてから、家族ぐるみでもお付き合いもさせていただいた。若林さんの魅力ある話のおかげで、ブラジルにおける日系美術界のことを知り、興味を持てるようになった。人だけではなく、日系社会の情報源にもなってきたサンパウロ新聞、ニッケイ新聞の廃刊もさみしい限りだった。

こうしてみると、日系社会からは一方的に恩恵を受けてきたが、自分の仕事などが役に立つことがあったのかと振り返ると心もとない。新型コロナなどもあってブラジルになかなか行けない中ではあるが、ブラジル社会、日系社会のため、今後も少しでも出会いを増やして、できることをやっていければと思う。

労作『アンドウ・ゼンパチ』（サンパウロ人文研）を読む 改めて二つの『ブラジル史』の意義を考える

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

昨年12月、サンパウロ人文科学研究所より、人文研究叢書第11号として『アンドウ・ゼンパチ―日系社会のオビニオン・リーダー』が刊行された。今年3月に入って、この本格評伝（312頁）をようやく入手することが出来たので、筆者は早速一読した。まさに力作にして労作である。生前のアンドウ氏（1900～1983）と面談した経験のある筆者にも初めて知るような多くのエピソードなどが冷静な文体で時系列的に叙述されており、重厚な歴史小説を読み終えた時と同じような感動が残った、と告白しておきたい。

この労作の著者は人文研理事にしてサンパウロ州弁護士古杉征己さん。アンドウ氏と同じく広島出身だ。研究者としては『ブラジル日本移民百年史第三巻』所収の、「第3章ブラジルにおける子弟教育（日本語教育）の歴史」、などの論考を発表しているが、2016年には戦後移民1世としては初めてOAB（弁護士協会）統一試験に合格し、2017年弁護士登録している。（この快挙については、弊誌2016年11月号掲載「ブラジル版司法試験に合格して」を参照願いたい。）

本書には、10年以上もの時間を費やした日伯両国での緻密な調査を踏まえた上で、親族や関係者も徹底取材した成果が盛り込まれており、アンドウ氏の“清貧にして恋多き人生”がこなれた文体で語られている。複雑な家族の事情、生い立ち、少年時代の挫折を乗り越え、東京外国語学校ポルトガル語科（第一期生）を卒業し、「ブラジルの中江兆民」になろうとの大志をいだいてブラジルに渡った安藤潔（本名）は、邦字新聞記者や日本語教師から社会活動を経て、著述家としても人文研初代専任研究員としても大きな業績を残した。カネに縁のない自分を諧謔的に命名した筆名ゼンパチ（金⇒全+八⇒ゼンパチ）を使って文筆活動を続けたアンドウ氏の思想的立場はコスモポリタン・マルクス主義だが、教条主義とは無縁の柔軟なりべラだった。ブラジル移民一世としては同化論者であった。

本欄では、アンドウ氏が残した著作の中でも二つの『ブラジル史』に焦点をあてて、いささか回顧的なメモを重ねてみたい。

河出書房版『ブラジル史』（1956年刊）

著者は、はしがきにおいて、「ブラジルの社会も、ひっきょう世界的な一時代が生んだ「必然の子」だったので、地理上の大発見に起源をもつ世界貿易、世界市場に結びつく近代植民地の歴史の一コマにすぎなかったのである」と記しているが、「ニッポン語でかかれた最初のブラジル歴史」と

の自負も窺える歴史本だ。筆者の学生時代（1973年）、渋谷の古本屋で偶然“発見”した時、興奮して350円を払ったことは、いまだに記憶に鮮明である。貪るように『ブラジル史』を読むことで、ブラジル史の“面白さ”に開眼した筆者にとっては、“ブラジル学の聖典”の如きインパクトをもたらした歴史本であった。

1974年3月、広島にて

大学の同級生O君と連れ立って、岩波版『ブラジル史』を執筆中であったアンドウ氏を広島に訪ねたのは、1974年3月のことであった。

アンドウさんは、出来の悪い学生にも丁寧に應對してくださり、サンパウロ州の市場経済成長史を核としたブラジル近代史叙述をやっているんだ、と書き込まれた原稿用紙を見せながら、ご自身の歴史観を語っていただいた。が、当時の筆者は、アンドウ史観のベースとなる大塚史学やカイオ・ブラードの経済史を巡って、覚えてたの従属論を持ち出して批判的な議論を吹っ掛けてしまっただけであった。若かったとはいえ、今思い出しても、赤面の至りである。

そんな劣等学生にも年賀状を送ってくださったのが、アンドウさんであった。

「賀春 1975年 年賀状ありがとうございます。ブラジル史のびのびになっていますが、今年内に出したいと毎日原稿用紙にとらめっこしています。」と書かれたアンドウさんからの賀状は、筆者には何物にも代えがたい宝となっている。

岩波書店版『ブラジル史』（1983年刊）

大塚久雄の経済史学を柔軟に吸収したアンドウさんは、大塚史学のキーワードである「局地的市場圏」がブラジルで広まったのは19世紀末以降のサンパウロであった、という仮説を立て、ブラジル資本主義経済史を叙述する構想を抱いたのではないかと、今の筆者は推量している。資本主義先進地のイギリスでは近世から自然発生的に多くの「局地的市場圏」が生まれ、それらが融合し総合化して国民経済を形成していったが、ブラジルの場合は、1888年の奴隷制廃止以降、急増した移民とコーヒー経済の拡大が並行して地域市場を創出し、その結果、サンパウロ州を中心とした産業資本主義が発達した、と考えたのがアンドウさんだった（と思う）。そのアンドウ史観の集大成が岩波版『ブラジル史』であったが、初稿（1976年）の改稿作業は病魔に襲われたアンドウさんは終えることが出来ず、西川大二郎教授による加筆・改稿を経て、ようやく1983年に刊行されたのであった。

絶版になって久しい岩波版『ブラジル史』の再刊を切望する次第である。



●今年の貿易黒字見込み

MCM コンサルタント会社発表のレポートによれば、今年2022年度の貿易黒字予想額は、2021年度の610億ドルを大幅に上回る750億ドルと見込まれている。この計算基礎となる、予想年間輸出総額は3,053億ドル（21年実績は2,686億ドル）、輸入総額は2,383億ドル（21年は2,059億ドル）となっている。石油や肥料などの主要輸入品の単価も上昇しているが、それ以上に輸出金額が増えると予想されるのは、ひとえに国際コモディティー価格の高騰のおかげである。ちなみに、イタウ銀行の予想値は、貿易黒字740億ドルである。（3月20日付けヴァロール紙）

●世論調査

BTG Pactual/FSB 社が3月20日に2千人を対象に実施した世論調査の結果は以下の通り。

・**大統領選第1回投票**：ルーラ元大統領（PT）43%、ボルソナール大統領（PL）29%、シロ・ゴメス元国家統合相（PDT）9%、モロ元法務相（Podemos）8%、ドリャ・サンパウロ州知事（PSDB）2%、ジャノネス下院議員（Avante）2%、レイチ・リオグランデ・ド・スル州知事（PSDB）2%、テベチ上院議員（MDB）1%、ダーヴィ

ラ（Novo）0%、誰にも投票しない3%、白票／無効票1%、分からない1%。

・**決選投票**：ルーラ54%対ボルソナール35%。ルーラ53%対モロ32%。ルーラ50%対シロ・ゴメス29%。ルーラ54%対ドリャ22%。ルーラ54%対レイチ26%。

・**有権者の71%は「大統領選では誰に投票するか既に決めている」と答えている**。「ボルソナールとルーラのどちらにも投票しない」は僅か11%であり、「第三の候補」の伸び代は大きくない。ボルソナールに投票すると答えた有権者の内、83%は「絶対にボルソナールに投票する。投票態度を変えることはない」と答えており、ルーラの場合、この数字は80%に達している。

・**大統領選では誰が負ければいいと思うか**：ボルソナール大統領64%、ルーラ元大統領24%、ドリャ・サンパウロ州知事3%。

・**ボルソナール政権に対する評価**：「非常に良い／良い」29%、「普通」17%、「悪い／非常に悪い」53%。

・**政府支持率**：支持34%、不支持61%。

・**「燃料高騰の責任は誰にあるか」**：連邦政府29%、ペトロプラス社22%、州知事21%、ウクライナ紛争18%、上記の理由全て5%、どれもでない1%、分からない4%。（21日付コレイオ・ブラジリエンセ）

キャンパス・コラム

USPでのオンライン留学を終えて

竹平健一
（上智大学4年）

私は2021年、（以前一度寄稿させていただいた通り）1年間のオンライン留学を経験した。留学先では哲学・文学・人間科学部に所属し、主にブラジル文学の研究を行った。これまでの人生で一番刺激的だったこの1年間を振り返って、主に2つの感想を抱いている。

1つ目は、日本とブラジルを文学的な視点から眺望すると、意外にも共通点が多かったりすることである。これは非常に学術的な点で私自身が得た感想である。私は秋学期にLiteratura Brasileira IVという科目を履修した。これはブラジルの著名な作家Machado de Assisについて研究する科目で、その中で私は同時代に日本で活躍した文豪・夏目漱石との比較研究を行った。約半年の授業を通してわかったことは、両者は直接的なかわりがなかったにも関わらず、執筆スタイルに類似点が多かったということである。例えば、MachadoはRessurreiçãoという作品で、漱石は『こころ』で作中に未亡人を登場させ、Machadoは人間の愛の本質に迫る役割を、漱石は戦争などを踏まえた当時の市民社会の脆弱性を皮肉の役割を担わせた。偶然とはいえ、未亡人という文学作品の登場人物をきっかけとした新たな対比に気づかれ、はっとした。

2つ目は純粋にポルトガル語が好きだという気持ちを改め

て再確認したということである。1つ目とは打って変わって全く個人的な感想であるが、そう思われる出来事は多くあった。例えば、秋学期に履修したPortuguês para Estrangeirosという科目は、時差の関係で日本時間の深夜2時から3時半に開講された。正直眠い、という感情に支配されることが多かったが、それでも最後までやり遂げることができたのはポルトガル語を使ったコミュニケーション、主に話すのが楽しかったからである。その授業では最終的には他の留学生と母国に関する意見交換などをし合う場が設けられた。ある中南米出身の学生が私に対し「日本は地理的に遠いけれど、いつか行ってみたい」と声を掛けてくれた時はとても嬉しかった。画面越しで相手の表情が伝わりづらく、ポルトガル語での意思疎通が初めは難しいことが多々あったが、少しずつ他者に伝わるポルトガル語が話せるようになってきたと身をもって感じる事ができたからである。この経験は今後の言語学習でも必ず生きてくると確信している。

以上が私の感想である。社会情勢が落ち着きブラジルへ渡航できるようになれば、実際にオンライン留学した大学へ足を運び、教授や友人と談笑したいと思う。苦しいことも多かったが、家にこもり大好きなポルトガル語に没頭できる非常に有意義な1年だった。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

岩波講座 世界歴史 14
『南北アメリカ大陸 ～17世紀』
(安村直己責任編集)

南北アメリカ大陸に焦点をあて、先史時代から17世紀までの多層的な歴史展開をマクロとミクロ両面から展望し、いくつかのテーマを深耕している。アンデスとメソアメリカにおける文明の興亡、マヤ人から見たスペインによる植民地支配、フランスとカリブ諸島、アメリカ植民地の経済とスペイン、などについての論考に加え、ポルトガル帝国から見た環大西洋世界、については、奴隷貿易が三角貿易型ではなく双方向型であった史実を論じている。
(岩波書店 2022年2月 304頁 3,200円＋税)

『つながりと選択の環境政治学』
(舛方周一郎著)

「ブラジルと同国を取り巻く関係構造」という『小さな窓』から、グローバル・ガバナンスという『広い世界』を見る

ことを目指す本書は、政治学の分析手法を活用して1990年代から2012年までの歴代政権による環境政策を巡る試行錯誤を凝縮的に論じている。政策決定に至るまでの属人的要素も肯定的に評価しているのが、本書の特徴。地球温暖化に懐疑的な現ポルソナー政権による環境行政の大幅劣化への批判的視点が弱いのが“不思議”だ。
(晃洋書房 2022年2月 256頁 5,700円＋税)

『サンバの町それから』

1990年の入管法改正により就労ビザを受給できるようになった南米日系人を主体とする外国人が町の人口の1割を占めるようになった群馬県大泉町は、今やアジア系外国人も移入した結果町民6人のうち1人が外国人(人口の19%)という多民族タウンとなった。住民の生活水準格差、子弟教育、町民との協働など町が抱える社会問題も多角化し、近未来の日本の縮図との見方も検証している。話題を呼んだ『サンバの町から』(1997年刊)の続編。
(上毛新聞社 2022年3月 240頁 税込1,540円)

『ブラジルの歴史を知るための50章』
(伊藤秋仁・岸和田仁編著)

多様性に富むブラジル史を50章で語

る試みが書籍化された。主体は通史編だが、考古学論争、先住民の抵抗、環境と開発、黒人運動、ブラジル音楽、農業パワー、などの章もあり、本文で扱いきれなかった様々なテーマ(食文化、サッカー文化、ディアスポラ事例など)については17のコラムがフォローしている。執筆協力者計28名による共著で、各執筆者の専門知が反映されている。一般読者の知的好奇心を引き出すような工夫もみられる歴史書。
(明石書店 2022年4月 396頁 税込み2,200円)

『変容する移民コミュニティ』
(駒井洋監修、小林真生編著)

日本における移民・難民のコミュニティ形成の歴史と現状についての最新報告書。ブラジル人については、アンジェロ・イシ教授の論稿「ブラジル人ーデカセギ時代の起源と終焉、時間、空間、階層をめぐる模索」が、概況(都道府県別では愛知県、市町村別では浜松市に最も多くのブラジル人が在住)から、集団意識の変化等の問題点を整理して叙述しており、その結語は「今後、ブラジル人の数は急増することもないれば、激減することもないだろう」。
(明石書店 2020年7月 206頁 2,800円＋税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

トメアスーあれこれ

イギリスBBCの『BBC NEWS BRASIL』というサイトでは、ブラジル関係のみならず、経済、国際関係からテクノロジーまで幅広くポルトガル語によるニュースを掲載しており、特に、『BBC lê』というコーナーでは、様々な興味深いテーマの記事がリストアップされているが、本文にアナウンサーによる朗読がついているので、ポルトガル語の聞き取りの勉強にもなり、お勧めだ。

先日、このコーナーを見ていたら、『Campo de concentração na Amazônia aprisionou centenas de famílias japonesas durante 2ª Guerra』という見出し(この見出しで記事を検索可)が目に入った。記事自体は、2020年8月に配信されたものだが、朗読部分は、最近添付されたようだ。まず冒頭で第2次世界大戦中、ブラジルに11か所あった敵性外国人の強制収容施設の一つとしてトメアスー(当時はアカラー郡)に設けられた強制収容所は、収容者のほとんどが日本人移住者とその子弟であったという点ではかの収容施設とは大きく違っていたことが紹介される。その上で、パラ州、アマゾナス州等から、財産を没収され、着の身着の儘で収監された日系の人々の苦悩を少し和らげたのが、自らも困難を極めていた現地在住の同胞による助け合いの精神だったと紹介している(この点についてBBCは、1929年の第一回トメアスー入植者の山田元さん(入植当時2歳)に直接取材している)。記事は、日系の人々が耐え難い犠牲を払ったにもかかわらず、その後ブラジル政府から賠償等が行われたことは

なく、トメアスーの日系社会は、その後の胡椒ブームで、ようやく戦時中のどん底から自力で立ち直り、現在は、アグロフォレストリーの技法を使って、農業発展への独自の貢献を成し遂げていると結んでいる。戦時中の財産の没収や強制収容に伴う困難については、アマゾン地域日本人移住史等に紹介されているが、それはあくまで主に日本人や日系人が読むことを想定したものであろう。このBBCの記事は、広く一般のブラジルの人々を対象に日系の人々がこの国で歩んできた歴史の一面を知らせるという意味で貴重なものだ。

話変わって、ベレンの知人から、ハウス食品が、トメアスーの胡椒を日本で販売しており、アグロフォレストリーと日系社会支援を前面に掲げた製品情報を発信しているとの情報提供があった。アグロフォレストリーや移住の歴史等トメアスー情報がコンパクトに紹介されている。(https://housefoods.jp/products/special/camta/index.html)

本件の経緯等をアルベルト 敬一 乙幡 CAMTA(トメアスー総合農業協同組合)理事長に聞いたところ、かつてトメアスーに移住し、その後日本に帰国した元移住者の仲介により、約20年前に株式会社オールスパイス商会との関係が始まり、最近に至り同社を介したハウス食品との胡椒事業(現在年間30トン程度、拡大傾向)がスタートした由である。(MK)

SAUDADE DO BRASIL

43年間南米一筋!ブラジル専門の旅行会社(株)アルファインテル

ブラジルへのご旅行・出張は創業1979年のアルファインテルにお任せください。

新型コロナウィルスの世界的な流行により、海外旅行に行くのは難しい状況が続いています。海外旅行に対する考え方も変わり、より安心・安全が求められるようになりました。コロナ禍でも、アルファインテルは南米系旅行会社で唯一のIATA(国際航空運送協会)公認代理店として、主に在留ブラジル人の皆様にブラジル行きの航空券を手配し続けている実績があります。ご出発前に必要なPCR検査・陰性証明書の様式やワクチンパスポートなど、各国の要件も最新情報にてご案内し、より安心・安全な旅をご提供します。

主要取扱航空会社:ルフトハンザドイツ航空、カタール航空、エミレーツ航空、エールフランス航空、KLMオランダ航空、ラタム航空、アメリカン航空、ユナイテッド航空、デルタ航空、トルコ航空、イベリア航空、ゴル航空他

航空券のほか、現地のホテル、車両、ガイドの手配も実績ある弊社にご用命ください。

お客様のお声

2007年よりアルファインテルさんとブラジル音楽好きに特化したブラジルツアーを開催しています。なかでも2010年度のジョアン・ジルベルト&ルイス・ゴンザガの故郷訪問ツアーは思い出深いです。案内してくれた現地ブラジル人ガイドさんも「こんな所に来たの初めて!」と写真を撮りまくるほどでした(笑)。入手困難なイヴェッチ・サンガロのコンサートチケットを人数分確保していただいたことにも感謝しています。コロナが収束したらまた再開しましょう!引き続きよろしくお願いします!

ブラジルへ帰国する際は必ず利用させていただいています。乗り継ぎ便に間に合わないトラブルなど、いざという時にブラジル現地でも相談できるので、安心してブラジルへ行けます。また、ブラジル観光地のことを知り尽くしたスタッフが旅行プランを提案してくださるので、はじめての方でも失敗しない最高のブラジル旅行を楽しむことができます。

僕が海外を旅するようになったのは25年くらい前。月日が経ち今は毎年のようにブラジルに行く生活になりました。治安状況の変化や新型コロナのような感染症が流行ったりしたとき、旅のアマチュアである僕らには知りようがない正確な現地情報や、危険を避けるノウハウが旅行会社にはあって、航空券をそこで買うということは、旅が終わり日本の土地を踏むまで見守ってもらっている、という安心感があることに気がつきました。旅の目的や希望実現のためのプランも一緒に考えてくれます。安心して旅の準備で実は一番大切なポイントです。アルファインテルさんの細やかな対応や気遣いが本当に助かります。

Willie Whopper氏
(Barzinho Aparecidaオーナー)



平野勇パウロ氏
(株アルテソルーション
代表取締役)



宮澤摩周氏
(パーカッションスト・
Quer Swingar Vem Pra Cá代表)



観光庁長官登録旅行業 第1835号
東京都港区西新橋 1-20-10 西新橋エクセルビル7階
株式会社アルファインテル
電話: 03-5473-0541
e-mail: info@alfainter.co.jp



Accredited
Agent

photo by Junko Sekine





Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia (ブレイジア) では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL 03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

日本ブラジル中央協会

イベントのご案内

5/10 サボイア駐日ブラジル大使
帰任前最終 オンライン講演会 ※逐語通訳付

講演者: エドゥアルド・サボイア駐日ブラジル全権大使
演題: 「駐日大使としての3年余を振り返る」(仮題)

日時: 2022年5月10日(火) 10:00 ~ 11:30 <日本時間>

開催方式: zoom ウェビナー

主催: 日本ブラジル中央協会

協賛: ブラジル大使館、在日ブラジル商工会議所

歴代の駐日ブラジル大使は、皆親日家ですが、サボイア大使の場合は、単に和食や日本文化に造詣が深いだけでなく、熱心に日本語を学習して、多くのスピーチを日本語でトライした点は特筆すべきものでした。その意味で、「超」親日家といって間違いない大使でしたが、残念ながら、このほどブラジルに帰任されることとなりました。

6/23 2021年度 日本ブラジル中央協会会員総会

日時: 2022年6月23日(木) 11:00 ~ 12:30 頃
※開催方式は、コロナ感染状況次第で決定

お知らせ

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジルト報」及びホームページへのバナー
広告掲載企業を募集しております。
広告掲載にご興味がある場合は、協会事務局までご連絡下さい。
Mail: info@nipo-brasil.org

法人・個人・学生 新規会員募集中

会員数 法人会員 105社 個人会員 約380名 (2022年4月現在)

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」
にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジルト報」の無料配布。
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に
参加できます。(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます。
4. 会員宛にメールでお伝えする、様々なブラジル情報をご覧頂けます。
5. ホームページにて、会員限定情報をご覧頂けます。

年会費

※入会金は不要です

法人会員 1口 (2口以上) 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
学生会員 1口 1,000円

お申し込み



《日本ブラジル中央協会公式HP》
<https://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会 検索

ブラジルでのビジネスを ご支援いたします！

医療分野
に強い

リサーチ・コンサルティング
通訳・翻訳

語学研修
確かな実績

ポルトガル語教育

赴任者
サポート
に強い

各種セミナーなど



<https://www.h-a-consulting.com>

詳しくはこちらをご覧ください

atsuko_hoshi@h-a-consulting.com



360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティプラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

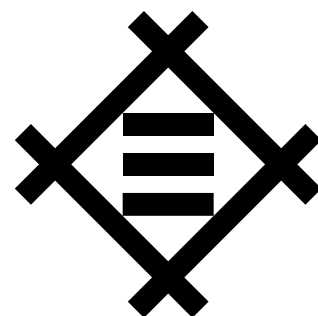
貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

[Business innovation-3]

現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、
増産や品質向上に貢献。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.